

長岡市埋蔵文化財調査報告書

# 大原C遺跡

—市道山本160号線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2010

新潟県長岡市教育委員会

## 例　　言

1. 本書は、新潟県長岡市加津保町字茨崎74番地ほかに位置する大原C遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、市道山本160号線道路改良事業に伴うものであり、長岡市教育委員会が実施した。
3. 遺跡確認試掘調査に要した費用は文化財保護部局である長岡市教育委員会が負担し、国庫および県費の補助交付金を受けた。本発掘調査に要した費用は原因者である長岡市が負担した。
4. 遺物の注記は、09+遺跡略号（OHC）の後、出土位置、取り上げ番号等を記した。
5. 出土した遺物と調査に関わる資料は、すべて長岡市教育委員会で保管している。
6. 調査の体制は以下のとおりである。

### (試掘確認調査)

調査主体　長岡市教育委員会（教育長 加藤 孝博）  
事務局　長岡市教育委員会科学博物館（館長 山屋 茂人）  
調査担当　長岡市教育委員会科学博物館 学芸員 山賀 和也  
発掘作業員　鳥羽 清 本田 進

### (本発掘調査)

調査主体　長岡市教育委員会（教育長 加藤 孝博）  
事務局　長岡市教育委員会科学博物館（館長 山屋 茂人）  
調査担当　長岡市教育委員会科学博物館 学芸員 山賀 和也  
現場代理人　閔 雅哉（株式会社 大石組）  
発掘作業員　尾木 求 春日 浩子 金安 常男 菊池 正代 棚村 チイ 永井 孝次  
三浦 勝男  
整理作業員　菊池 正代 棚村 チイ

7. 本書は、田中 靖（長岡市教育委員会科学博物館）の指導を受け、調査担当が執筆・編集を行った。
8. 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、下記の方々より多大なるご教示・ご協力を賜った。記して厚く御礼申し上げる。（五十音順・敬称略）  
駒形 敏朗　山田 隆博

## 目 次

第Ⅰ章 調査にいたる経緯	1
第Ⅱ章 遺跡をとりまく環境	2
1 遺跡の位置	
2 周辺の遺跡	
第Ⅲ章 遺跡確認試掘調査	4
第Ⅳ章 本発掘調査	5
1 調査区の設定	
2 調査の経過	
3 基本層序	
4 遺構の説明	
5 遺物の説明	
第Ⅴ章 まとめ	8
参考文献	

### 挿図・表目次

第1図 遺跡の位置	1
第2図 周辺の遺跡	2
第3図 試掘確認調査トレンチ配置図	4
第4図 基本層序	5
第1表 周辺の遺跡一覧	3
第2表 遺物観察表	9

### 図版目次

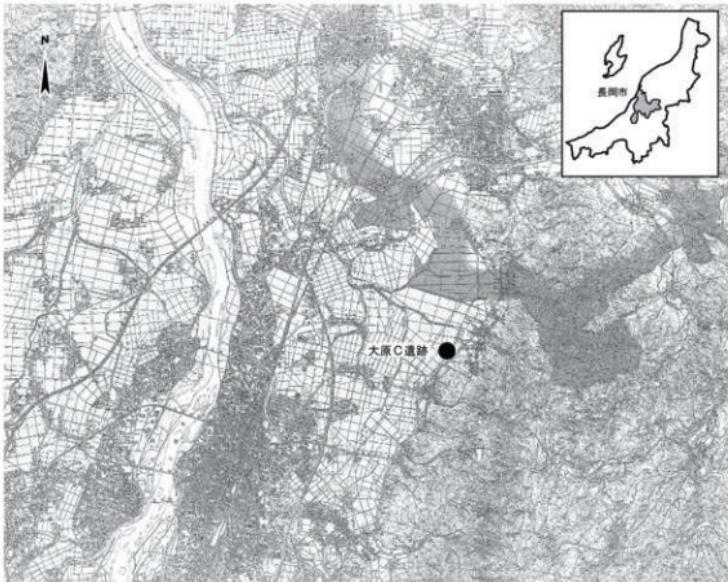
図版1 遺跡全体図・遺構断面図	
図版2 掘立柱建物跡	
図版3 土器実測図1	
図版4 土器実測図2	
写真図版1 調査写真1	
写真図版2 調査写真2	
写真図版3 遺物写真1	
写真図版4 遺物写真2	



## 第Ⅰ章 調査にいたる経緯

平成20年10月、長岡市土木部道路建設課（以下、事業者と略称）から長岡市教育委員会（以下、市教委と略称）に対し、長岡市加津保町における市道山本160号線道路改良工事に係る埋蔵文化財の取り扱いについて協議の申し入れがあった。事業は、現在設置されている幅2.5m延長約80mの道路を幅6m（法面を含めると約8m）に拡幅するものである。市教委は、事業計画地が大原C遺跡の範囲内であるため、事業着手前の埋蔵文化財の試掘確認調査が必要である旨を事業者に伝えた。調査の実施時期については更に協議を重ね、平成22年度から事業に着手するため発掘調査を平成21年度中に完了する必要があるとのことから、試掘確認調査を平成21年の春に行い、その結果本発掘調査の必要がある場合は同年夏に実施することで両者が合意した。

市教委は、平成21年4月22日付け長教博第30号で文化財保護法第99条1項の規定による埋蔵文化財発掘調査の着手を新潟県教育委員会教育長に報告し、平成21年4月30日と5月27日の二日間で試掘確認調査を行った。その結果、事業対象地の東側部分で遺物が多量に出土した。この遺物が多量に出土した部分について、事業者と協議を重ねたが、計画変更是極めて困難であることから、工事着手前に本発掘調査を行うことで合意し、準備に入った。平成21年7月9日事業者から本発掘調査の依頼があり、平成21年8月6日付け長教博第158号で文化財保護法第99条1項の規定による埋蔵文化財発掘調査の着手を新潟県教育委員会教育長に報告し、本発掘調査を開始した。



第1図 遺跡の位置 (1:120,000)

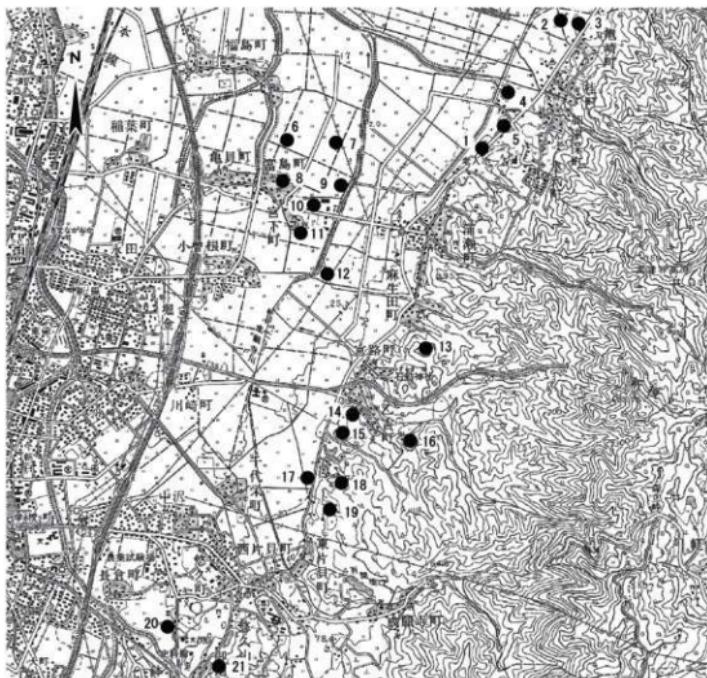
## 第Ⅱ章 遺跡をとりまく環境

### 1 遺跡の位置

大原C遺跡は、新潟県長岡市加津保町字茨崎に位置している。遺跡のある旧長岡地域は信濃川が南北を貫くように流れしており、それによって形成された沖積平野を挟むように、右岸には東山丘陵と呼ばれる魚沼丘陵と左岸には西山丘陵と呼ばれる東頭城丘陵が位置している。遺跡が位置する長岡地域の東部は、標高700mを越える急峻な東山丘陵から信濃川に流れ込む柄吉川や椿桂川などの中小河川によって山裾に扇状地が形成されている。本遺跡はその扇状地の先端部に立地している。

### 2 周辺の遺跡

大原C遺跡周辺の遺跡は、第2図に示したとおり東山丘陵縁辺部と平野部の境界付近に多く分布している。東山丘陵縁辺部の遺跡は、平成5年度に行われた新潟県教育委員会主催の遺跡詳細分布調査やその後の圃場整備に関わる分布調査によって新たに発見された遺跡が多い。発掘調査されている遺跡は少ないが、発掘資料と採集資料から主な遺跡を概観することにしたい。



第2図 周辺の遺跡 (1:50,000)

縄文時代の遺跡は、大原C遺跡の約200m北に茨崎遺跡が位置している。茨崎遺跡は扇状地の端部付近に位置する集落遺跡である。採集された土器は中期前葉の新保・新崎式が最も多く、中期前葉を主体とする遺跡である。弥生時代の遺跡としては、大原C遺跡の北方に藤ヶ森遺跡、横山遺跡、原山遺跡が位置している。これらは、主に弥生時代後期から終末期の集落遺跡である。藤ヶ森遺跡は平成10年に調査が行われ、竪穴住居跡1棟、掘立柱建物跡1棟、方形周溝墓1基が確認されている。また、遺跡の南側の丘陵上に2基の墳丘墓が確認されており、この地域の有力者のものと見られる。藤ヶ森遺跡の南に位置する横山遺跡は、北陸・信州・東北・畿内・東海などの影響を受けた土器が出土している。また、住居群の回りに溝を巡らす環濠集落で、軍事的な防衛機能を備えていた。原山遺跡は、横山遺跡の南約400mの小丘陵上に位置しており、弥生時代中期～後期の土器と、石器や玉類が採集されている。また、南西に向いた丘陵の崖面に、地表からU字状に彫り込まれた溝の断面が確認されており、環濠あるいは方形周溝墓が想定されている。古墳時代の遺跡は、五斗田遺跡、麻生田古墳群、七ツ塚古墳群があげられる。五斗田遺跡は、藤ヶ森遺跡の西隣に位置し、横山遺跡や藤ヶ森遺跡に後続する前期の集落遺跡とみられる。五斗田遺跡の南方には麻生田古墳群（2基）と七ツ塚古墳群（7基）が位置しており、前期に属すると考えられる麻生田古墳群との関係が注目される。

古代の遺跡は、東山丘陵縁辺部と長岡市富島町周辺に遺跡が分布している。丘陵縁辺部の遺跡は、土用本西遺跡が調査されており10世紀末～11世紀前半に位置づけられ、大型建物跡や銅腕輪の出土から有力者の居宅跡とされる。この他堂ヶ峰遺跡、御山大沢遺跡は調査が行われていないが、採集された遺物から、9世紀以降の遺跡と考えられている。富島町周辺は從来「八丁沖」と呼ばれる低湿地帯が広がり、遺跡が存在する可能性が少ないと考えられていた地域であるが、近年のは場整備事業に伴う調査で遺跡が発見された。遺跡の位置する場所は、水田中の微高地に分布し、現在発見されている遺跡のほかに遺跡が立地していた可能性がある。この他、丘陵縁辺部には須恵器窯跡が存在する。窯跡は、8世紀前半に操業していたと考えられる間野窯跡、その後に位置づけられる岩村窯跡が位置している。また、中野内遺跡は、間野窯跡に近いことから須恵器生産に従事した工人の集落跡の可能性が指摘されていたが、平成13年の確認調査により8世紀後半から9世紀初頭に位置づけられる窯跡であることが確認され、近接する地域に3ヶ所の窯跡が所在し、それぞれの窯跡の消費地が注目されるところである。

番号	種別	名称	時代	所在地	備考
1	遺物包含地	大原C遺跡	平	加津保町字茨崎・大原	H 5 新
2	集落跡	五斗田遺跡	古	亀崎町字五斗田	H15 新
3	遺物包含地	藤ヶ森遺跡	弥	亀崎町字藤ヶ森 760 他	H 5 新
4	遺物包含地	原山遺跡	弥～古	加津保町字原山 977 他	S58 新
5	遺物包含地	茨崎遺跡	禪	加津保町字茨崎・大原	
6	遺物包含地	首田遺跡	平・中世	富島町字首田他	H17 新
7	遺物包含地	五百畠遺跡	弥・古・平・中世	富島町字五百畠他	H17 新
8	遺物包含地	古村遺跡	平	富島町字古村他	H17 新
9	遺物包含地	浅田遺跡	弥・古	富島町字浅田	H17 新
10	遺物包含地	櫛町遺跡	弥・古・平・中世	宮下町字櫛町他	H17 新
11	遺物包含地	火焚面遺跡	奈～平	宮下町字大堀田 216 他	
12	遺物包含地	長衣遺跡	禪・弥・平	麻生田町字長衣	H 5 新
13	古墳	麻生田古墳群	古	麻生田町字南谷 2691 他	H 5 新
14	遺物包含地	岩村遺跡	弥	乙吉町岩村 2604	
15	窯跡	岩村窯跡	平	乙吉町字岩村・朴ノ木谷	
16	遺物包含地	堂ヶ峯遺跡	禪	乙吉町字堂ヶ峯 3508 他	
17	遺物包含地	中野内遺跡	平	東片貝町字891 他	
18	窯跡	間野窯跡	平	乙吉町字朴ノ木谷 972	
19	古墳	七ツ塚古墳群	古	東片貝町字下山	H 5 新
20	集落跡	土用木内遺跡	平	長倉町字土用木 1344 番地他	H18 新
21	遺物包含地	御山大沢遺跡	奈～平	御山町字前山 122 他	

第1表 周辺の遺跡一覧

### 第Ⅲ章 遺跡確認試掘調査

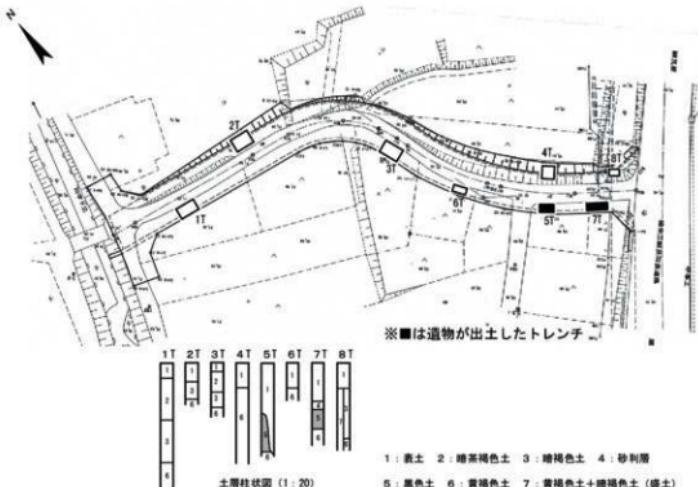
遺跡確認試掘調査は、平成21年4月30日・5月27日の2日間で実施した。調査地は、現在道路として使われているため、道路拡幅予定地内で現在畠地となっている部分に1.5×2m程度のトレンチを8ヶ所に設定し、調査を行った。調査面積は約28m<sup>2</sup>であり、調査対象面積の約5%にあたる。調査は、バックホウで掘削を行い、遺物が検出された時点で人力により精査した。

1日目は1～5Tを設定し、対象地の西側から調査を開始した。1T～4Tからは、遺物、遺構がともに確認されなかった。5Tでは、耕作土直下から黄褐色土まで暗褐色土が厚く堆積していたが、一部に黒色土が堆積していた。遺物は土師器の微細な破片が数点出土したが、遺構は確認されなかった。この結果から、1～3Tまでの範囲は本調査の必要がないものと判断したが、遺物が出土した5Tの周辺では遺物・遺構が検出される可能性があるため、追加で確認調査を行うこととした。

2日目は5Tの周辺を中心にトレンチを設定し、調査を行った。6Tでは、耕作土直下に黄褐色土が堆積しており、遺物・遺構とともに検出されなかった。5Tの南東側に設定した7Tでは、耕作土・砂利層の下層に黒色土（遺物包含層）が堆積しており、遺物が多量に出土した。しかし、遺構は確認されなかった。7Tでの遺物出土状況から本発掘調査が必要と判断し、その範囲を確認するため、7Tの道を挟んだ東側に8Tを設定した。8Tでは、遺物、遺構とともに確認されず、トレンチの東側の約半分が黄褐色土と暗褐色土が混ざった盛土が厚く堆積していた。

以上の結果から、遺物が出土した5T・7Tを含む、約100mについて本発掘調査を行うこととした。

出土遺物は、古代の土師器が出土し、須恵器は出土しなかった。主な器種はロクロ成形の椀・長甕・小甕であった。詳細は、本発掘調査で出土した遺物と合せて後述することにしたい。



第3図 試掘確認調査トレンチ配置図 (1:750)

## 第IV章 本発掘調査

### 1 調査区の設定

試掘確認調査の結果から、事業対象区画の東部分に本発掘調査区を設定した。調査区内には、南北に合せて10m間隔の大グリッドを設定し、その間に任意で2m間隔の小グリッドを1つの大グリッドに25区画設定した。グリッドの名称は、大グリッドが西からアラビア数字の1・2、北からアルファベットのA・Bとし、小グリッドは北西角を基準に西から番号をつけた。

### 2 調査の経過

大原C遺跡は、事業計画地の東部分の98mについて行うもので、概ね幅7m、長さ15mの範囲で発掘調査を行った。8月19日、調査に当たって、迂回路を設置する必要があるため、迂回路に係る部分について発掘調査を行った。ここでは、ピットが6基検出され、遺構断面と平面の図化と写真撮影を行い、埋め戻した。8月20日迂回路を設置し、バックホウにより表土を掘削し、その後人手での発掘作業を行った。あわせて、調査用グリッド杭を打設し、安全管理施設の設置等の作業を行った。8月21日から包含層の掘削を行った。8月24日に1A10グリッド付近で、26日に1A18・23グリッドで遺物がまとまって出土した。包含層掘削は8月28日までに終了し、8月31日から遺構精査を行った。確認した遺構は、掘立柱建物跡とピットである。これらの遺構断面図の作成及び写真撮影を行い、その後完掘した。9月3日遺跡の全景写真と写真測量を行った。9月4日南壁と西壁の土層断面図を作成し、調査を終了した。その後、埋戻しと道路の復旧及び、迂回路の撤去を行った。

### 3 基本層序

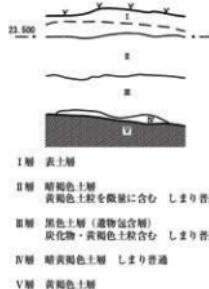
調査区の現況は、畠地および道路（砂利敷き）である。

土壌の堆積状況は、I～V層に分類できる。I層は、現在の耕作土及び現道の砂利層である。II層は、黄褐色土粒を微量に含む暗褐色土層である。南壁では旧道路跡の砂利層が幅約3.8m、厚さ約10cmで堆積している。III層は、遺物包含層で炭化物・黄褐色土粒を含む黒色土層である。しまりは普通。厚さはおよそ15～40cmで調査区東端では見られなくなる。IV層は、暗黃褐色土層で、しまりは普通。V層は、黄褐色土層である。遺構確認面の標高は南側で23.000m、北側で22.450mとなり、南から北に向かって緩やかに傾斜する地形である。

### 4 遺構の説明

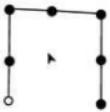
今回の調査では、ピット29基、掘立柱建物跡1棟が確認された。

ピット 検出されたピットで用途や機能がわかるものはない。また、P-8・13から微細な土器片が出土した以外は遺物の出土もなかった。P-27・31は掘立柱建物跡の柱穴と同等の規模であることから柱穴の可能性がある。しかし、これらと関連性を持つピットは検出されなかった。



第4図 基本層序 (1:40)

掘立柱建物跡（SB1） 主軸方向は、N-21°-Eを向く。建物の規模は、梁行2間（5.1m）・桁行2間（4.9m）分を確認。南部分は、調査区外になることから確認できなかった。確認できた部分の柱間は、梁行が西から2.4m・2.6m、桁行は東辺が北から2.6m・2.3mと不揃いである。柱穴は、長径35.0～56.0cmを測る円あるいは椭円形を呈する。深さは35.0～54.0cmである。柱穴の覆土は、黒褐色土を基調とするが、柱旗は確認できなかった。柱穴からは土師器の無台椀と長甕の破片が出土しているが、微細な資料のため図化できなかった。



## 5 遺物の説明

遺物は、ほとんどが土師器であり、須恵器の出土はごくわずかである。この他弥生土器、縄文土器が出土している。遺構からの出土はほとんどなく、包含層出土のものが主体である。特に1B04・1B05・1B09・1B10グリッドにまたがる部分と1A18・1A23グリッドにまたがる部分でまとまって出土した。

須恵器 1～4は、杯蓋である。1は、擬宝珠型のツマミ部分の資料である。2・3は、ツマミ部分と口縁部分を欠損しており、全形は不明である。天井部はヘラケズリが施されている。2は、小泊窯跡の製品である。4は、口縁部資料で下方にしっかりと折れる形態である。口径は14.8cmを測る。5は、無台杯である。切り離しはヘラ切りで、底径は9.8cmを測る。6・7は、有台杯である。6は、底部の破片資料で高台は、外に開き細く高い形態である。高台は貼り付け高台である。3とセットになるものである。7は、口縁部資料で、深身の形態のものと想定される。破片が小さいため口径が出来なかった。小泊窯跡の製品である。1・3～6は在地産と見られ、9世紀前半に属するものと考えられる。

土師器 8～25は、ロクロ成形の無台椀である。口径は、14・16が11cm程度でやや小さいが、その他は11.6～12.6cmで12cm前後である。底径は、4.4cm～6.0cmである。器壁を丁寧に仕上げているものがほとんどであり、底部の切り離しが確認できる資料全てが糸切り未調整である。口縁部の形態は、若干外反するもの（8・11・14～15）と、胴部からまっすぐ伸びてくるもの（9～10・12・16）とある。8はP-13から出土した。口縁端部で外反する。口径は12.6cmを測る。この他、遺構からの出土は、P8・P19から土師器が出土したが、微細な破片であったため図化できなかった。13は、黒色土器で内面のみ黒色処理された椀の口縁部資料である。器面調整は外面・内面ともにヘラミガキが行われている。口縁部は、緩く外反する。口径は、14.4cmを測り、黒色処理されていない土師器無台椀よりも大きい。19は、内面が赤彩されている。24は底部にヘラ記号を持つ。26～30は、ロクロ成形の小甕である。26は、器形の全体が想定できる資料である。口縁部は上方に屈曲し、受け口状に形成されている。底部は、平底であり、切り離しは糸切り未調整である。口径は14.6cm、底径は6.6cmを測る。27～29は口縁部から胴部の資料である。27・28は単純な口縁の形態であり、29に比べて器壁が薄い。口径は、27が10.2cm、28が10.7cmを測る。29は、口縁端部を摘み上げている。口径は9.4cmを測る。30は平底の底部で、切り離しは糸切り未調整である。底径は6.4cmを測る。31は、台付鉢の下部資料である。高台が欠損している。外面の器面調整はロクロケズリが施されており、内面の器面調整は、横方向と斜め方向のハケ目である。32～38はロクロ成形の長甕である。口縁部が残るものは、いずれも口縁部が「く」の字状に外半している。32・33は、口縁端部は丸く仕上げられている。32は、器形全体が窺える資料である。器面調整は、外面胴部上半がロクロナデ、中間に一部ヘラケズリが行われ、胴部下半は平行タタキである。内面下半は放射状の当て具をあてている。口径

は、19.2cmを測る。33は、外面にカキ目を施している。口径は20.4cmを測る。34～36は、口縁部外面が下方につまみ出され、段を有している。また、口縁端部外面に丸みを帯びているもの（34）と、平坦な面を形成しているもの（35・36）がある。34は外面にカキ目、内面は摩滅により不明な部分もあるが、横ハケと一部斜ハケが施されている。口径は、21.2cmを測る。35は、外面胴部上半はロクロナデ、下半は平行タタキを施す。内面胴部上部はカキ目が施されており、下半部は同心円文の当て具をあてている。口径は、35が19.6cm、34が21.6cmである。37は、口縁部が断面三角形状になる。口径は、25.0cmを測る。38は胴部下半の資料である。外面は平行タタキ、内面は放射状の当て具をあてている。39～41はロクロ成形の鍋である。いずれも口縁部資料で、残念ながら胴部下半及び底部の形状は不明である。口縁部は、「く」の字状に外反しており、口縁端部で摘み上げられているもの（41）もある。39は、胴部外面下半はロクロケズリが施されており、内面は横ハケと一部斜ハケが施されている。口径は、34.4cmを測る。40は、外面胴部下半が下から上へ斜め方向にヘラケズリされており、内面は口縁端部と胴部にハケ目が施されている。口径は、34.8cmを測る。41は、口縁部は極端に外反し、外面に段を有する。口縁端部はつまみ上げられている。破片が小さいため、口径は出せなかった。42は、弥生土器の二重口縁甕の口縁部である。外面の口縁部はヨコナデ、頸部はハケ目が施され、内面はヨコナデされている。破片が小さかったため、口径は出せなかった。年代は、弥生時代末期～古墳時代に位置づけられるものと思われる。

## 第V章　まとめ

今回の調査で、遺構は掘立柱建物跡1棟、遺物は土師器を中心として約2,000点の土器が出土し、9世紀末から10世紀初頭の集落遺跡であることが確認された。調査範囲が狭いため遺跡の全容は把握できなかつたが、大原C遺跡は、沖積地から少し高い扇状地上に立地し、掘立柱建物を持つ、この時期の一般的な集落跡と考えられる。

しかし、出土遺物を見てみると土師器が大半を占め、須恵器はほとんど出土しない点が注目される。越後の古代の土器構成は、8世紀前半の段階で、食膳具・貯蔵具が須恵器、煮炊具が土師器という構成であったが、9世紀以降食膳具の須恵器に対する土師器の割合が徐々に増加し、9世紀後半には約70%に達する（坂井1988）。同じ古志郡に位置する八幡林遺跡、下ノ西遺跡の当該期の食膳具の構成を見てみると八幡林遺跡A地区SD13・15、SX17・29から出土したものを合計した比率は67.7%（和島村2005）、下ノ西遺跡SX852では57%（和島村2003）であり、食膳具の6割前後を土師器が占める。しかし、一方で須恵器は3～4割であり、なくなるわけではない。また、9世紀後半以降須恵器生産は在地での生産がほとんどなくなり、佐渡の小泊窯跡群に集約され、越後全体に集約される（坂井ほか1991）。これらのことから、本遺跡においても小泊窯跡群で生産された須恵器の食膳具・貯蔵具が一定量出土してもいいものであるが、第IV章で前述したとおり微細な破片がわずかに出土したのみである。これが、調査範囲の狭さゆえに出土しなかつたのか、あるいは本遺跡の性格を示すものであるかは、今後の資料の増加を待って判断したい。

## 参考文献

- 新潟県教育委員会 1984 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第35集 今池遺跡・下新町遺跡・子安遺跡」
- 坂井 秀弥 1988 「越後・佐渡における古代土器の生産と流通」『シンポジウム 北陸の古代土器研究の現状と課題』 石川考古学研究会・北陸古代土器研究会
- 坂井秀弥・鶴巻正昭・春日真実 1991 「佐渡の須恵器」『新潟考古』第2号
- 春日 真実 2005 「越後における奈良・平安時代土器編年との対応関係について－「今池編年」「下ノ西編年」「山三賀編年」の検討を中心に－」『新潟考古』第16号
- 春日 真実 2007 「越後における古代の煮炊具について」『新潟考古』第18号
- 和島村教育委員会 2003 「和島村埋蔵文化財調査報告書第14集 下ノ西遺跡Ⅳ」
- 和島村教育委員会 2005 「和島村埋蔵文化財調査報告書第16集 八幡林遺跡Ⅳ」
- 長岡市 1992 「長岡市史」資料編1 考古
- 長岡市教育委員会 2002 「長岡市内遺跡発掘調査報告書－千代栄町地区－」
- 長岡市教育委員会 2006 「平成17年度長岡市内遺跡発掘調査報告書」
- 長岡市教育委員会 2007 「平成18年度長岡市内遺跡発掘調査報告書」
- 長岡市教育委員会 2007 「土用木西遺跡」

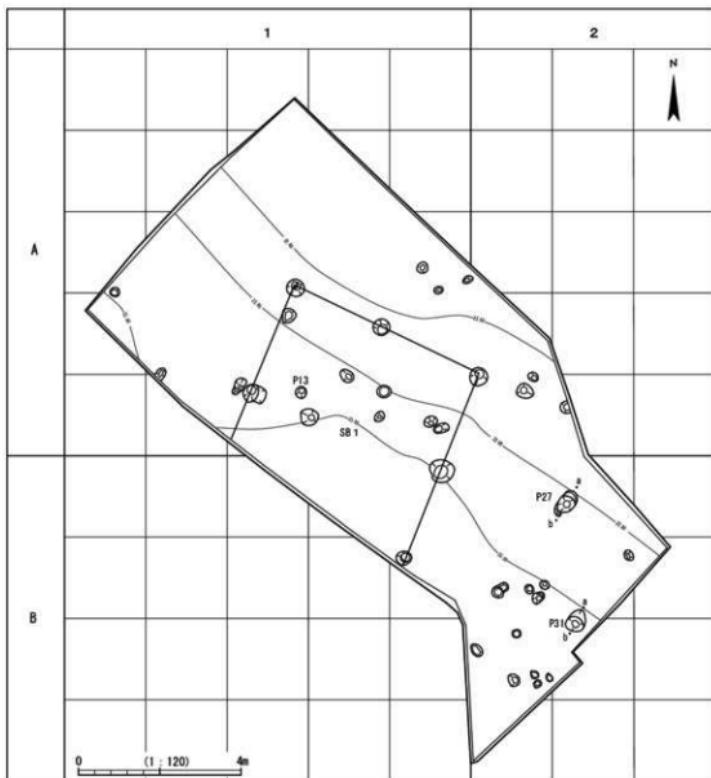
※胎土 石英(黄)、長石(長)、雲母(雲)、赤色粒子(赤)、白色粒子(白)、黑色粒子(黒)で表記した。

第2表 遺物観察表(1)

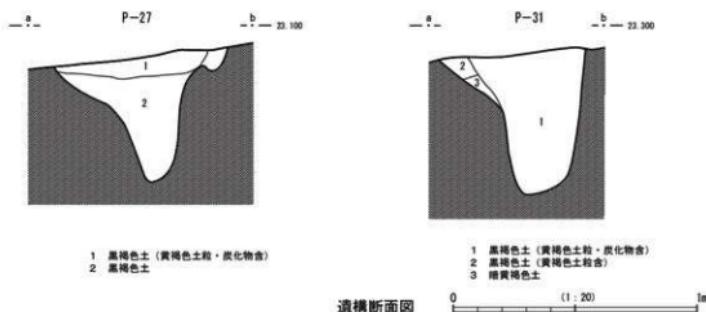
No.	出土 地点	種別	器種	口径	底径	器高	回転	色調(外・内)	胎 土	備 考
1	IA12	須恵器	杯蓋	—	—	—	—	灰・灰白	英・長・海	
2	IA18	須恵器	杯蓋	—	—	—	—	灰オリーブ・灰オリーブ	長・白・黒	ロクロケシリ小泊塗
3	IA07	須恵器	杯蓋	—	—	—	—	褐灰・灰	長・海	天井部ロクロケシリ
4	2A21	須恵器	杯蓋	148	—	—	—	灰・灰	英・長・白	
5	IA12	須恵器	無台杯	—	9.8	—	—	灰・灰黃	白	底部ヘラ切り
6	2B02	須恵器	有台杯	—	7.6	—	—	灰オリーブ・灰オリーブ	英・長	底部ヘラ切り
7	IA12	須恵器	有台杯	—	—	—	—	灰白・灰白	英・白	小泊塗
8	P-13	土師器	無台輪	11.8	—	—	—	浅黄・浅黄	英・長・海	
9	試7T	土師器	無台輪	11.6	—	—	—	にぶい橙	英・長・赤・海	
10	IB09	土師器	無台輪	12.1	—	—	—	にぶい黄橙	英・長・赤・輝	
11	IB09	土師器	無台輪	12.2	—	—	—	にぶい黄橙・にぶい黄橙	英・長	
12	IB09	土師器	無台輪	12.4	—	—	—	にぶい黄橙・にぶい黄橙	英・長・雪	
13	IA25	土師器	無台輪	14.4	—	—	—	橙・黑	英・長・赤	外ヘラミガキ・黒色處理
14	IB04	土師器	無台輪	10.8	4.4	3.5	—	橙・橙	英・長・赤・海	底部糸切未調整
15	IB10	土師器	無台輪	12.6	6.0	3.1	—	にぶい黄・橙	英・長・海	底部糸切未調整
16	IB09	土師器	無台輪	11.0	4.8	3.6	—	橙・橙	英・長・赤・角・海	底部糸切未調整
17	IB09	土師器	無台輪	—	4.6	—	—	にぶい黄橙・浅黄橙	英・長・赤・角	底部糸切未調整
18	IB09	土師器	無台輪	—	4.6	—	右	橙・にぶい橙	英・長・赤・角	底部糸切未調整
19	IA23	土師器	無台輪	—	4.6	—	右	橙・浅黄橙	英・長・輝・海	底部糸切未調整
20	IB09	土師器	無台輪	—	4.8	—	—	にぶい黄橙・にぶい黄橙	英・長・角	底部糸切未調整
21	IA18	土師器	無台輪	—	4.9	—	右	灰黄橙・にぶい黄橙	英・長・角・海	底部糸切未調整

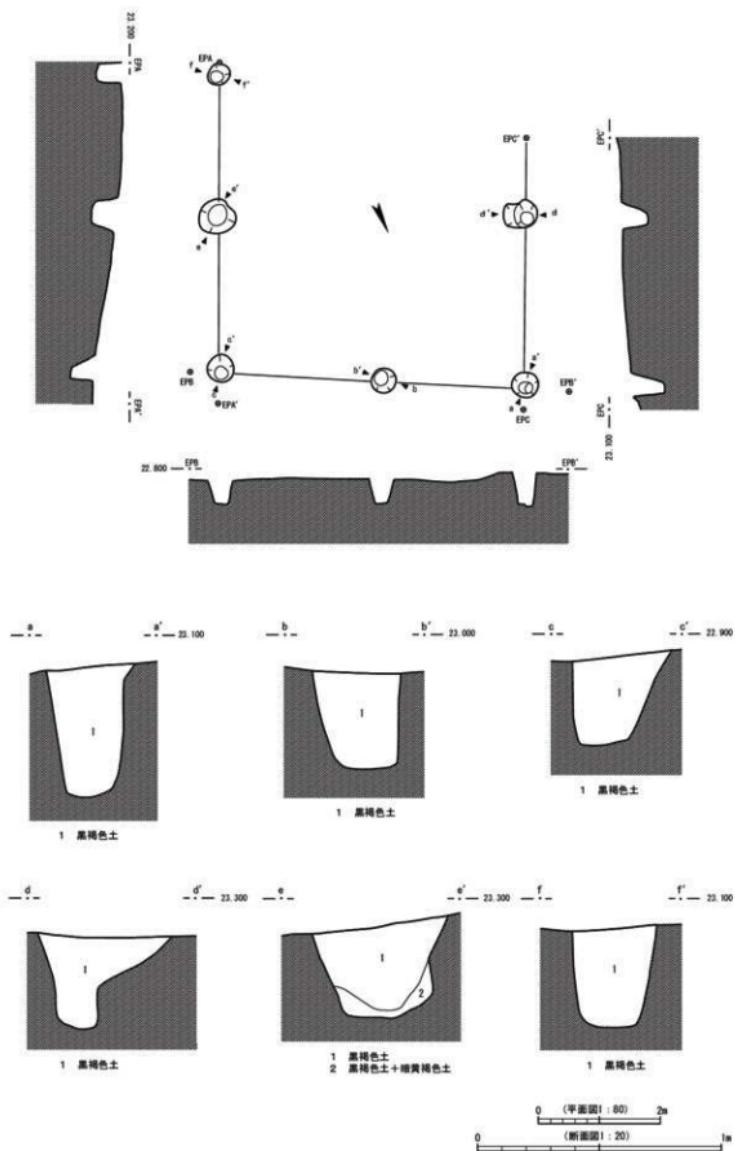
遺物観察表(2)

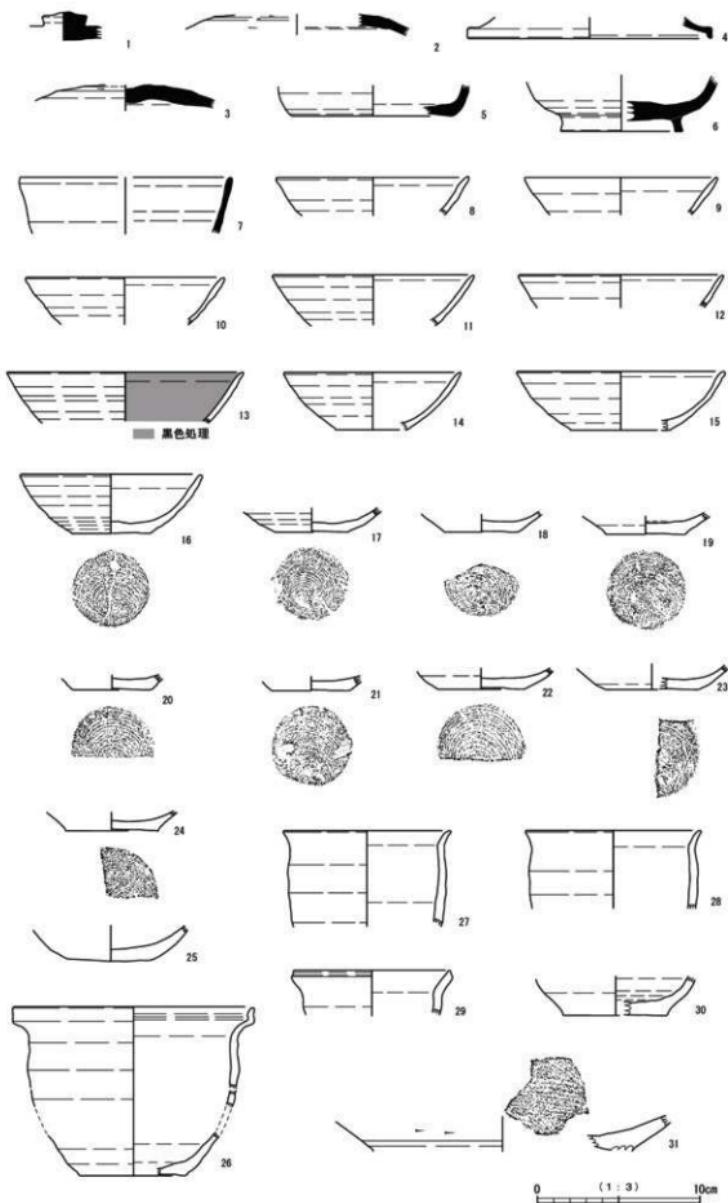
No.	出土 場所	種別	器種	口径	底径	器高	回転	色調(外・内)	輪	土	備 考
22	試TT	土師器	無台碗	—	5.2	—	右	棕・浅黄橙	英・長・海	英・長・未調整	底底余切未調整
23	IA19	土師器	無台碗	—	5.2	—	—	にぶい黄橙・棕	英・長・赤・角・輝	英・長・未調整	底底余切未調整
24	IA25	土師器	無台碗	—	5.6	—	—	棕・にぶい黄橙	英・長・赤・角	英・長・未調整	底底余切未調整
25	IA16	土師器	無台碗	—	5.1	—	—	にぶい棕・にぶい黄橙	英・長・角	英・長・未調整	底底余切未調整
26	IB99	土師器	小甕	14.6	6.6	—	—	浅黄橙・にぶい黄橙	英・長・赤・海	英・長・未・海	底底余切未調整
27	IA18	土師器	小甕	10.2	—	—	—	にぶい黄橙・にぶい棕	英・長・輝・海	英・長・未・海	外クロケズリ
28	IA18	土師器	小甕	10.7	—	—	—	棕・にぶい棕	英・長・輝・海	内横ハゲ斜ハゲ	外下部平行タキ
29	IA16	土師器	小甕	9.6	—	—	—	浅黄・浅黄	英・長・赤	内下部收束状當て具	内下部平行タキ
30	IA12	土師器	小甕	—	6.4	—	—	にぶい黄橙・浅黄	英・長・角	外カキ目	底底余切未調整
31	IA24	土師器	台付钵	—	—	—	—	にぶい黄橙・にぶい黄橙	英・長・赤・輝	外上部カキ目	内横ハゲ斜ハゲ
32	IB99	土師器	長甕	19.2	—	—	—	棕・棕	英・長・赤	外上部平行タキ	外下部平行タキ
33	試TT	土師器	長甕	20.4	—	—	—	浅黄橙・浅黄橙	英・長・赤・角・海	内下部收束状當て具	内下部平行タキ
34	IB99	土師器	長甕	21.2	—	—	—	にぶい黄橙・にぶい黄橙	英・長・赤	外上部カキ目	底底余切未調整
35	IB99	土師器	長甕	19.6	—	—	—	明黄褐・にぶい黄	英・長	外下部平行タキ	外下部平行タキ
36	IA18	土師器	長甕	21.6	—	—	—	浅黄橙・にぶい黄橙	英・長・赤	内上部ハゲ日	内上部ハゲ日
37	IA18	土師器	長甕	25.0	—	—	—	にぶい黄橙・棕	英・長・赤	外下部平行タキ	外下部平行タキ
38	IA18	土師器	長甕	—	—	—	—	浅黄橙・浅黄橙	英・長・赤・海	内横ハゲ	内横ハゲ
39	IA24	土師器	鍋	34.4	—	—	—	にぶい黄・にぶい黄橙	英・長・赤・角・輝	外胴部ヘラケズリ	外胴部ヘラケズリ
40	IB99	土師器	鍋	34.8	—	—	—	棕・にぶい黄橙	英・長・赤・角・輝	内横ハゲ	内横ハゲ
41	IA12	土師器	鍋	—	—	—	—	浅黄橙・浅黄橙	英・長・赤	—一部斜めハゲ	—一部斜めハゲ
42	IA19	弦生土器	二重口縁甕	—	—	—	—	赤褐色	英・長・海	外口縁部ヨコナデ	頭部ハケ
										内ヨコナデ	

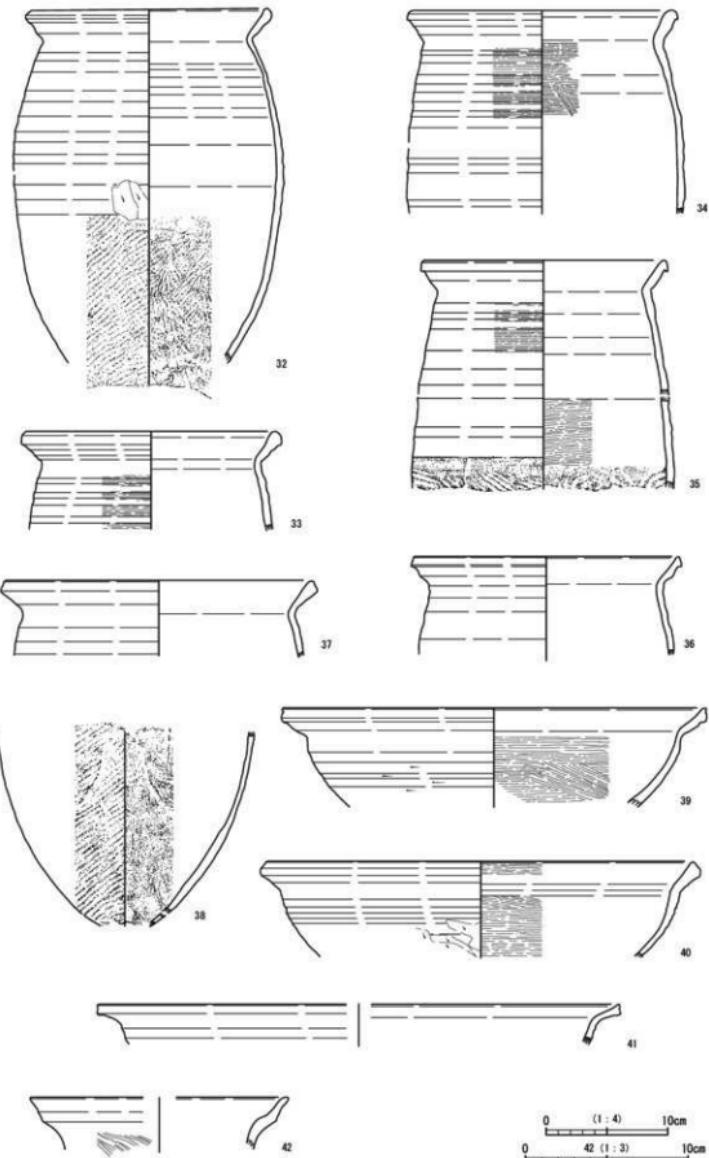


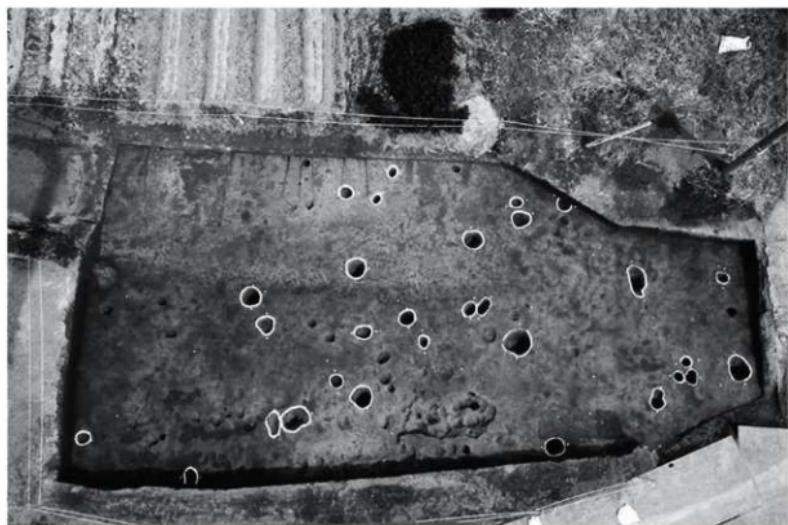
遺跡全体図











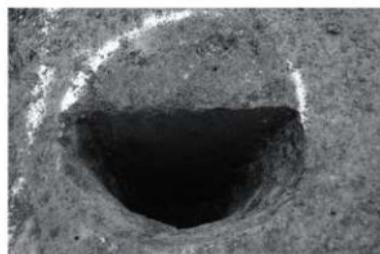
遺跡完掘状況



調査前現況



SB1 完掘



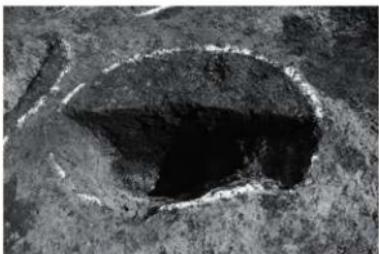
SB1 柱穴断面 (a 西から)



SB1 柱穴断面 (b 北から)



SB1 柱穴断面 (c 東から)



SB1 柱穴断面 (d 北から)



SB1 柱穴断面 (e 西から)



SB1 柱穴断面 (f 北から)



遺物出土状況 1



遺物出土状況 2



作業状況 1



作業状況 2



(S=1:3)



33



34



35



36



37



38



39



40



41



42

(S = 1 : 3)

## 報告書抄録

ふりがな	おおはらしーいせき							
書名	大原C遺跡							
副書名	市道山本160号線改良事業に伴う埋蔵文化財調査報告書							
卷次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	山賀和也							
編集機関	長岡市教育委員会							
所在地	〒940-0072 新潟県長岡市柳原町2番地1 TEL0258-32-0546							
発行年月日	2009年3月19日							
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡					
おおはらしーいせき 大原C遺跡	新潟県 長岡市 加津保町字茨崎	15021	312	37° 17' 38"	138° 42' 21"	20090820 ~ 20090904	98m <sup>2</sup>	市道改良事業
所収遺跡名	種別	主な時期		主な遺構		主な遺物		特記事項
おおはらしーいせき 大原C遺跡	集落跡	平安時代		掘立柱建物跡・ ビット		土師器・須恵器		

### 大原C遺跡

市道山本160号線改良事業に伴う埋蔵文化財調査報告書

平成22(2010)年3月12日 印刷

平成22(2010)年3月19日 発行

発行 新潟県長岡市教育委員会

印刷 株式会社第一印刷所

